

野村 歡・橋本美芽(著)

「OT・PTのための住環境整備論」

中屋久長

高知リハビリテーション学院

近年、国の大きな改革路線に医療制度構造改革がある。増え続ける医療費の伸びを高齢者の自己負担増や生活習慣病の予防で抑制することが骨格となっている。そのことは、先般の診療報酬改定、介護保険制度改正に反映されている。

さらにリハビリテーション(リハ)領域での改革は、その背景に平成 16 年 1 月「高齢者リハ研究会報告」が大きく影響している。「最も重点的に行われるべき急性期のリハ医療が不十分」「長期にわたって効果の明らかでないリハ医療が行われている」「医療から介護への連続するシステムが機能していない」「リハとケアとの境界が明確に区分されておらずリハとケアが混在している」「在宅におけるリハが不十分」等々の指摘がなされている。

これらを勘案すると高齢者リハのあるべき方向性は、利用者の生活機能に関する最適の目標を 1 人ひとりに設定し、その目標を実現させるために立てられた個別的な計画に基づき、期間を設定して行われるべき

ものであり、最終的に重要な点は、在宅・訪問リハで現実の生活の場での日常生活の自立と社会参加の向上を図ることであり、高齢者本人と自宅環境との適合を調整する役割を持ち、自宅での自立支援の効果的なサービスを提供することが肝要となる。つまり、環境とのミスマッチをいかに最小限に止めるかである。しかし、現在では最も利用が進んでいない領域といえる。

本書は、そのような意味で在宅リハを推進する大きな手引書であると考ええる。本書の帯に杉原素子先生が記しているように、著者はわが国の障害者・高齢者に関わる住環境整備分野の第一人者であり、昭和 50 年に高知リハ学院が理学療法士養成を初めて修業年 4 年制とした時に「リハ建築学(現・生活環境論)」という科目を設定し、長期にわたってご指導いただいた経緯がある。長年にわたる研究・実践活動が凝縮された書であり、第 1 章は「住環境整備を始める前に」とし「住宅」に関する概念を、第 2 章では整備の考え方、第 3 章その基本技術、第 4 章はその実際について述べられている。そして圧巻ともいえる巻末資料は、本来推進すべき在宅リハの大きなポイントである住環境整備の手本となると考える。

●AB 判 326 頁

定価 3,780 円(本体 3,600 円+税 5%)

2007 年 三輪書店・刊